

高岡市にある前田利長ゆかりの石造物の色彩と帯磁率

長 秋雄¹⁾

1. はじめに

高岡市は、富山県の北西部に位置し、2017年1月1日現在の人口は174,275人で(富山県, 2017)、富山県西部の中心都市です。加賀前田家二代藩主の前田利長(1562-1614)は、慶長10年(1605年)に家督を異母弟の利常(1593-1659)に譲り富山城に移りましたが、慶長14年(1609年)の大火で富山城が焼失し、同年に幕府の許しを得て高岡城を築き、城下町を開いて高岡と命名しました(栗野ほか, 2013)。慶長19年(1614年)に利長が死去し、翌年の一国一城令により高岡城は廃城となりましたが、三代藩主利常が商工本位の町への転換政策を実施し、「加賀藩の台所」と呼ばれる程の隆盛を極めました。高岡市が申請した「加賀前田家ゆかりの町民文化が花咲くまち高岡一人、技、心一」は、2015年度の「日本遺産」に認定されました(高岡市, 2017)。

高岡市には、前田利長墓所(国指定史跡)、利長の菩提寺である瑞龍寺(国宝)があり、利長を祀り弔う石造物が多数残されています。筆者は、2014年～2015年に行った高岡城石垣の帯磁率調査(長, 2017a)の際に、これら石造物を調査する機会を得ました。本稿では、高岡市にある前田利長ゆかりの石造物を紹介しながら、使われた戸室石の色と帯磁率を報告します。

戸室石は、加賀藩前田家の本城である金沢城の石垣に使われた石材で、金沢城の南東約8 km～10 kmに位置する戸室山とキゴ山に石切丁場跡が確認されています(北垣ほか, 2008)。戸室石の岩石名は「含斜方輝石-含かんらん石-黒雲母-角閃石安山岩および同デイサイト」で、斜長石や石英の白い斑晶が特徴であり、石基の色が青灰色を呈するものから赤色～赤茶色を呈するものがあり、前者は青戸室石、後者は赤戸室石と呼ばれています(酒寄, 2013)。帯磁率は、与えた磁場の強さに対する誘導磁化の強さの比(無次元の値)で、地質試料では磁鉄鉱の含有量と正相関します。戸室山では表層に赤系の戸室石が、内部に青系の戸室石が分布していて、赤系の戸室石は溶岩表面が空気に触れて鉄分が酸化した部分であり(石渡, 2001)、

初生の磁鉄鉱の大部分が高温酸化によって赤鉄鉱に変化しています(星・石渡, 2004)。このため、赤系の戸室石での帯磁率が小さく、青系の戸室石で帯磁率が大きくなります。戸室石の色は、帯磁率 8×10^{-3} SI 未満では赤系(小豆色もしくはレンガ色)、帯磁率 12×10^{-3} SI 以上では青系(青色もしくは灰色)でした(長, 2013)。そのため長(2017b)では、測定した帯磁率を3分類(8×10^{-3} SI 未満, 8×10^{-3} SI 以上 12×10^{-3} SI 未満, 12×10^{-3} SI 以上)の比率を示しました。今回の帯磁率測定でも携帯型岩石帯磁率測定器(KT-6)を用いました。前田利長墓所内区の基壇貼石と墓道敷石については、個数が多く時間的制約から1石での測定は1箇所のみとしました。六角型の石燈籠では、1石からなる火袋・中台などの各部位毎に、5箇所測定し平均値を代表値としました。四角型の石造物では各部位毎に、4箇所測定し平均値を代表値としました。

また、戸室石の一軸圧縮強度の平均値は青戸室石で67 MPa、赤戸室石で46 MPaであり(木越ほか, 2010)、青戸室石の強度は赤戸室石の約1.5倍です。加賀藩穴生方後藤家文書に「戸室石目方之事 赤石 壱尺六方 目方拾七貫貳百目 水二つけ七百目増、青石 壱尺六方 目方拾八貫四百目 水二つけ四百目増、右相様シ候目方ニ候得共、石ニ寄目方少充増減有之、堅き石程目方相増候」とあり(日本海文化研究室, 1976)、青戸室石が赤戸室石より堅いことは江戸時代でも分かっていました。

2. 前田利長墓所にある石造物

前田利長墓所は、利長三十三回忌にあたって、三代藩主利常が前年の正保2年(1645年)に造営を命じ、翌年に竣工しました。周囲を堀で画された内区(南北64 m・東西61 m)と南側の外区が遺存しています(栗山ほか, 2008)。

内区は、毎年9月13日に行われる前田利長公顕彰祭の時にのみ一般公開されます。外区はいつでも参詣することができ、多様な石造物を間近で見ることができます。2009年2月に国指定史跡になりました。

主な石造物に使われた石材とその帯磁率を、第1表に

1) 産総研 地質調査総合センター地圏資源環境研究部門

キーワード：高岡市、前田利長墓所、瑞龍寺、八丁道、石造物、色彩、帯磁率

第1表 高岡市にある前田利長ゆかりの石造物に使われた石材と帯磁率

所在地	名称(栗山ほか, 2008)	観察・帯磁率測定箇所	石材	帯磁率, $\times 10^{-3}$ SI	
前田利長墓所(国指定史跡)	内区	前田利長墓の笠塔婆	塔身	花崗岩	5.7
			台座	花崗岩	2.3
			基礎の3石	花崗岩	2.8, 6.1, 12.8
		前田利長墓の基壇	上段上面(笠塔婆より南の敷石)	戸室石	第1図a
			下段上面(南側の敷石)	戸室石(赤)	第1図b
			下段立面(南面)と階段	戸室石(青)	第1図c
		墓道	縁石	戸室石(青)	12.7~18.4
			手前の敷石	戸室石(赤)	1.1~9.4
			奥の敷石	戸室石	第1図d
		六角型石燈籠, 9基	火袋, 中台, 竿, 基礎	戸室石(青)	第1図e
		石門	柱(左)	花崗岩	7.0
			柱(右)	花崗岩	6.5
	外区	石橋	板石6枚	戸室石(青)	14.3~16.3
		四角層塔型石燈籠, 2基	2基合計で13部位	坪野石(安山岩)	12.6~13.4
		円型石灯籠	笠, 板石, 火袋, 中台, 竿, 基礎, 基壇	戸室石(青)	13.3~20.7
		変形五輪塔型石燈籠	地輪, 水輪 基壇	戸室石(青) 砂岩(藪田石)	17.1, 18.9 0.03~0.10
		手水鉢	本体	戸室石(青)	16.2
大型六角型石燈籠		火袋受座, 中台, 竿, 基礎, 基壇(2段) 基壇(上段)の2石	花崗岩	4.0~9.0	
			花崗岩2	17.2, 18.5	
瑞龍寺	六角型石燈籠, 10基	宝珠, 笠, 火袋, 中台, 竿, 基礎, 基壇	戸室石(青)	第1図f	
	水鉢	水鉢 竿, 基礎	戸室石(青)	14.2	
			花崗岩	5.7, 4.2	
	生飯台	本体	戸室石(青)	12.6	
	石廟, 5基		笏谷石(凝灰岩)	測定せず	
	宝篋印塔(石廟内), 5基		笏谷石(凝灰岩)	測定せず	
	四角型石燈籠(利長石廟前), 2基	宝珠, 笠, 火袋, 中台, 竿, 基礎	花崗岩	5.5~7.5	
	花香燭台	本体, 竿, 基礎	花崗岩	6.8, 5.9, 5.9	
	無縫塔(歴代住持の墓標), 23基	塔身	安山岩(20基) 花崗岩3(2基) 砂岩(1基)	第1図g 0.04, 0.18 2.2	
八丁道	六角型石燈籠, 2基	宝珠, 笠, 火袋, 中台, 竿, 基礎, 基壇	戸室石(青)	9.0~16.3	
	四角型石燈籠, 32基	宝珠, 笠, 火袋, 中台, 竿, 基礎	戸室石	第2図	

示します。

2.1 内区にある石造物

2.1.1 前田利長墓の笠塔婆

2段からなる基壇の上に立つ笠塔婆(口絵 p. 31 写真1)は, 宝珠・笠・塔身・台座・基礎からなり, 総高 6.8 m です。用材は花崗岩です。三十三回忌(1646年)の造立と考えら

れています(栗山ほか, 2008)。

塔身・台座・基礎に使われた花崗岩の帯磁率は, 5.7×10^{-3} SI, 2.3×10^{-3} SI, 2.8×10^{-3} SI, 6.1×10^{-3} SI, 12.8×10^{-3} SI でした。

2.1.2 前田利長墓の基壇

この基壇は, 三十三回忌(1646年)に造立された可能性

が高いと考えられています。基壇は2段からなります(口絵 p. 31 写真 1)。上段は裾幅 10.4 m の正方形状で高さ 1.9 m, 下段は裾幅 15.5 m の正方形状で高さ 3.1 m です。上段立面と下段立面は蓮華を浮彫りした青戸室石(口絵 p. 31 写真 1, 2, 3)で飾られていて、総数は 130 石です(栗山ほか, 2008)。

基壇の上段上面の敷石は、多くが赤戸室石です。笠塔婆より南側(正面手前側)の敷石(68 石)での帯磁率ヒストグラムを第 1 図 a に示します。帯磁率 8×10^{-3} SI 未満が 43 石(63%), 8×10^{-3} SI 以上 12×10^{-3} SI 未満が 23 石(34%), 12×10^{-3} SI 以上が 2 石(3%)でした。

基壇の下段上面の敷石では、赤戸室石のみが使われています(口絵 p. 31 写真 2)。南側の 37 石での帯磁率ヒストグラムを第 1 図 b に示します。帯磁率は全て 8×10^{-3} SI 未満でした。

基壇の上段立面と下段立面そして階段には、青戸室石のみが使われています。南面(下段立面(南面)と階段)に使われた 141 石での帯磁率ヒストグラムを、第 1 図 c に示します。帯磁率 8×10^{-3} SI 未満はなく、 8×10^{-3} SI 以上 12×10^{-3} SI 未満が 6 石(4%), 12×10^{-3} SI 以上が 135 石(96%)でした。

2.1.3 前田利長墓の墓道

墓道(口絵 p. 31 写真 1 の手前)の両側の縁石には青戸室石が使われています。19 石の帯磁率は 12.7×10^{-3} SI ~ 18.4×10^{-3} SI でした。帯磁率 3.1×10^{-3} SI のものが 1 石だけあり、後補(後世の補修)と考えます。

内側の敷石の大きさ・形状は、墓道の手前と奥で異なります。手前 3.7 m までは、正方形状の赤戸室石製の敷石 24 石が 4 列・6 行に敷かれていて、24 石の帯磁率は 1.1×10^{-3} SI ~ 9.4×10^{-3} SI でした。その奥、基壇の階段までの墓道では、大きさが異なる大小の正方形状と長方形状の敷石がモザイク状に敷かれていて、赤戸室石と青戸室石が混在しています。奥の敷石(73 石)での帯磁率ヒストグラムを、第 1 図 d に示します。帯磁率 8×10^{-3} SI 未満が 24 石(33%), 8×10^{-3} SI 以上 12×10^{-3} SI 未満が 34 石(47%), 12×10^{-3} SI 以上が 15 石(21%)でした。

2.1.4 六角型石燈籠(墓所内区)

9 基の六角型石燈籠(口絵 p. 31 写真 3)が、内区にあります。9 基はほぼ同形・同寸で、全高約 3m, 笠葺手長径約 1.2 m です。用材は全て青戸室石です。9 基とも、三十三回忌(1646 年)からほどなくの造立と考えられます(栗山ほか, 2008)。

9 基の火袋・中台・竿・基礎に使われた青戸室石(36 石)の帯磁率ヒストグラムを、第 1 図 e に示します。全て帯磁率 11×10^{-3} SI 以上でした。

2.1.5 石門

内区の入口に石門があります。花崗岩の角柱を左右に建て、花崗岩の笠木をかけています。明治(1868 年~)になってからの造立と考えられています(栗山ほか, 2008)。

左右の角柱に使われた花崗岩の帯磁率は、 7.0×10^{-3} SI と 6.5×10^{-3} SI でした。これらの値は、高岡城石垣と富山城石垣に使われた早月川の川原にある花崗岩の多頻度帯 6×10^{-3} SI ~ 9×10^{-3} SI(長, 2017a)と対比できました。

2.2 外区にある石造物

2.2.1 石橋

石橋が、内区と外区の間にある幅 8.8 m の堀に、2 枚並列し 6 枚の板石(長さ 290 cm・幅 93 cm・厚さ 31 cm)で架けられています。五十回忌の寛文 3 年(1663 年)の造立と考えられています(栗山ほか, 2008)。

6 石とも青戸室石で、帯磁率は 14.3×10^{-3} SI ~ 16.3×10^{-3} SI でした。

2.2.2 四角層塔型石燈籠

2 基 1 対の四角層塔型石燈籠(口絵 p. 31 写真 4, 総高 2.7 m)が、外区の北西隅、前田利長茶毘の場所とも伝わる場所に東西に並び立っています。用材は全て黒褐色の坪野石(安山岩)です(栗山ほか, 2008)。

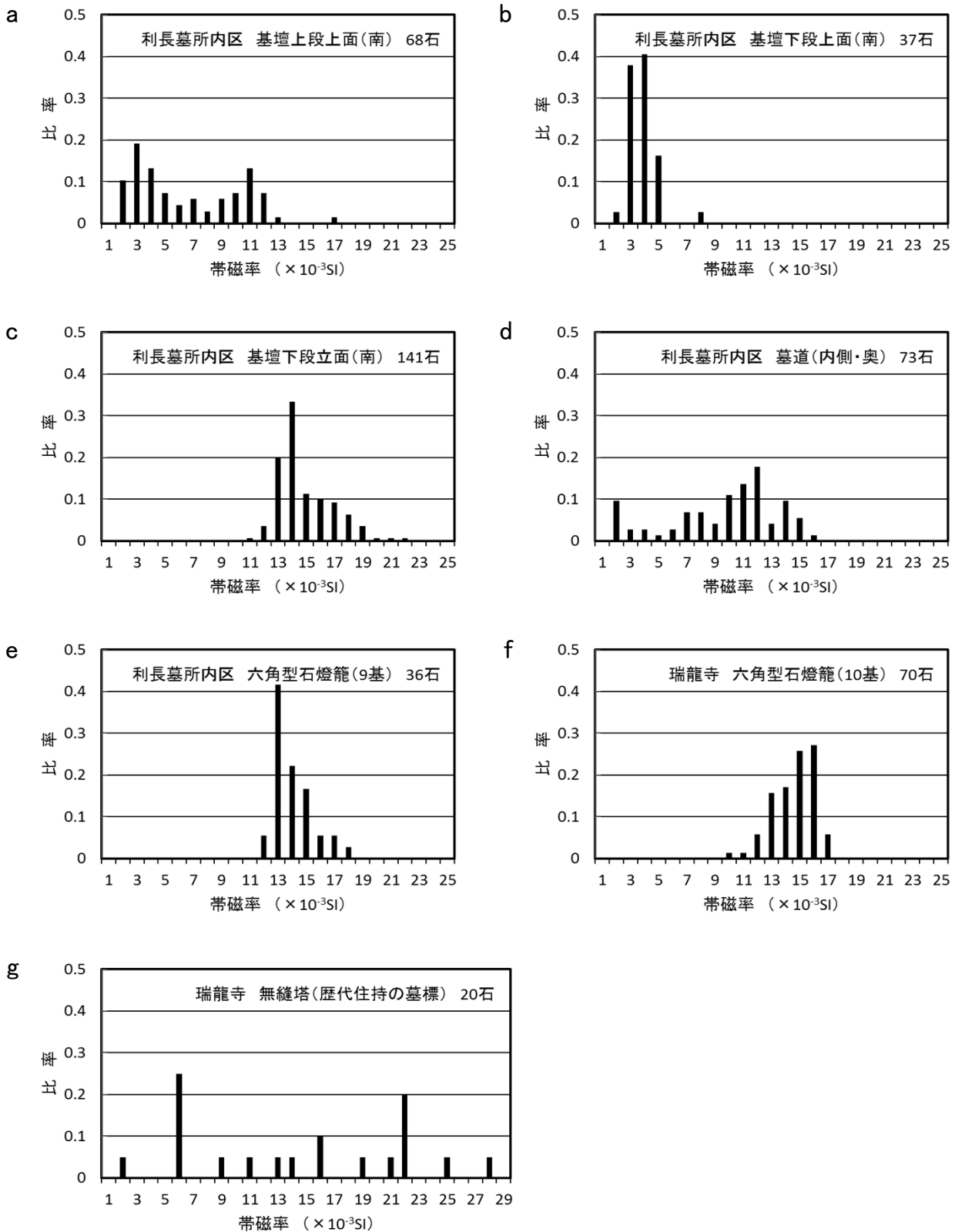
13 部位の坪野石の帯磁率は、 12.6×10^{-3} SI ~ 13.4×10^{-3} SI でした。

坪野石は、現在の石川県金沢市坪野町(金沢城の南約 8.5 km)で切り出された安山岩です。使用例は少なく、金沢城玉泉院丸庭園の色紙短冊積み石垣の V 字型水樋(石川県金沢城調査研究所, 2009)、玉泉院丸庭園の本丸方向にある石垣、金沢城本丸跡の手水鉢、利常が明暦 3 年(1657 年)に創建した小松天満宮の十五重石塔(小松天満宮, 2017)に使われています。

2.2.3 円形型石燈籠

2 基 1 対の円形型石燈籠(口絵 p. 31 写真 5, 総高 3.5 m)が、参道の東西に立っています。用材は全て青戸室石です。五十回忌(1663 年)の造立と考えられています(栗山ほか, 2008)。

これらの青戸室石の帯磁率は、 13.3×10^{-3} SI ~ 20.7×10^{-3} SI でした。



第1図 高岡市にある前田利長ゆかりの石造物での帯磁率ヒストグラム。
 帯磁率 $(n-1) \times 10^{-3}$ SI 以上 $n \times 10^{-3}$ SI 未満の個数を全数に対する比率で示す。
 a: 利長墓の基壇上段上面(笠塔墓南側の敷石 68石), b: 利長墓の基壇下段上面(南側敷石 37石), c: 利長墓の基壇下段立面と階段(全 141石), d: 利長墓の墓道(奥の敷石 73石), e: 墓所内区の六角型石燈籠(9基の 36石), f: 瑞龍寺の六角型石燈籠(10基の 70石), g: 瑞龍寺の歴代住持の墓標(安山岩 20石)

2.2.4 変形五輪塔型石燈籠

変形五輪塔型石燈籠(口絵 p. 31 写真 6, 総高 6 m)が、外区南側の木立の中にあります。用材は基壇のみが藪田石(石灰質シルト岩)で、他は青戸室石とみられています(栗山ほか, 2008)。

地輪と水輪は青戸室石で、帯磁率は 17.1×10^{-3} SI と 18.9×10^{-3} SI でした。目視の限りですが、これらより上部も青戸室石と思われました。

2.2.5 手水鉢

手水鉢が、参道の南端にあります。用材は青戸室石です。五十回忌(1663年)の造立と考えられています(栗山ほか, 2008)。

この青戸室石の帯磁率は、 16.2×10^{-3} SI でした。

2.2.6 大型六角型石燈籠

富山県内最大で、花崗岩を使った大型六角型石燈籠(口絵 p. 31 写真 7, 総高 6.3 m)が参道東側にあります。二百回忌の文化 10 年(1813 年)の造立と考えられています(栗山ほか, 2008)。

火袋受座・中台・竿・基礎・基壇に使われた花崗岩 22 石の帯磁率は、20 石が 4.0×10^{-3} SI ~ 9.0×10^{-3} SI でした。これらの値は、高岡城石垣と富山城石垣に使われた早月川の川原にある花崗岩の多頻度帯 6×10^{-3} SI ~ 9×10^{-3} SI (長, 2017a) と対比できました。残り 2 石の帯磁率は 17.2×10^{-3} SI と 18.5×10^{-3} SI であり、これらの値は早月川の川原にある大熊山花崗閃緑岩の帯磁率(長, 2017a) と対比できました。

2.2.7 六角型石燈籠(外区)

花崗岩製の六角型石燈籠が 31 基あります。これらは、大正 2 年(1913 年)の整備時に瑞龍寺や八丁道の六角型を模刻した石灯籠です(栗山ほか, 2008)。

帯磁率が 0.1×10^{-3} SI ~ 0.2×10^{-3} SI であったことから、早月川の川原にある花崗岩とは異なる花崗岩であると考えます。

3. 瑞龍寺にある石造物

高岡山瑞龍寺は利長の菩提寺です。三十三回忌にあたって、三代藩主利常が前年の正保 2 年(1645 年)にそれまでの法円寺の地に造営を命じ、五十回忌の寛文 3 年(1663 年)に竣工しました(高岡市教育委員会文化財課, 2009)。平成 9 年(1997 年)12 月に、山門・仏殿・法堂が国宝

に指定されました。総門・禅堂・大庫裏・回廊・大茶堂は、国の重要文化財に指定されています。利長墓所の西約 870 m(八町)にあり、墓所と瑞龍寺を結ぶ参道は「八丁道」と呼ばれています。

主な石造物に使われた石材とその帯磁率を、第 1 表に示します。

3.1 六角型石燈籠(瑞龍寺)

10 基の六角型石燈籠(口絵 p. 32 写真 8)があります。10 基はほぼ同形・同寸で、全高 2.4 m, 笠葺手長径 1.2 m です。用材は全て青戸室石です。10 基とも五十回忌(1663 年)の造立と考えられています(栗山ほか, 2008)。

10 基の宝珠・火袋・中台・竿・基礎に使われた青戸室石 70 石の帯磁率ヒストグラムを、第 1 図 f に示します。帯磁率 8×10^{-3} SI 未満はなく、帯磁率 8×10^{-3} SI 以上 12×10^{-3} SI 未満が 6 石(9%)で、 12×10^{-3} SI 以上が 64 石(91%)でした。

3.2 水鉢

水鉢が、法堂の前、左手に置かれています。水鉢部分が青戸室石で、笠と基礎は花崗岩です(栗山ほか, 2008)。

水鉢に使われた青戸室石の帯磁率は 14.2×10^{-3} SI で、竿と基礎に使われた花崗岩の帯磁率は 5.7×10^{-3} SI と 4.2×10^{-3} SI でした。

3.3 生飯台

生飯台(口絵 p. 32 写真 9)が、法堂の前、右手に置かれています。基礎・竿・中台は後述する八丁道の四角型石燈籠のものが転用されています。生飯台の上面は浅く彫りこまれ、側面は請花で装飾されています(栗山ほか, 2008)。

この生飯台は青戸室石で、帯磁率は 12.6×10^{-3} SI でした。

3.4 石廟

回廊の外側に、笏谷石(福井県産の凝灰岩)でできた石廟(口絵 p. 32 写真 10, 11)が 5 棟あります。前田利長、前田利家、織田信長、正覚院(信長室)、織田信忠の廟で、中に笏谷石製の宝篋印塔が祀られています(栗山ほか, 2008)。

3.5 四角型石燈籠(利長石廟前)

2 基 1 対の四角型石燈籠(口絵 p. 32 写真 11)が、利長の石廟の前にあります。竿に彫られた銘に、法号「瑞龍院殿聖山英賢大居士」と「慶長第捨九甲□□五月日」(1614

年)を読み取れます(栗山ほか, 2008)。

宝珠・笠・火袋・中台・竿・基礎に使われた花崗岩 11 石の帯磁率は 5.5×10^{-3} SI \sim 7.5×10^{-3} SI であり, 早月川の川原にある花崗岩の多頻度帯 6×10^{-3} SI \sim 9×10^{-3} SI(長, 2017a)と対比できました。右の燈籠の火袋の花崗岩は, 帯磁率が 0.14×10^{-3} SI であったため, 後補と考えます。

3.6 花香燭台

花香燭台(口絵 p. 32 写真 11)が, 利長の石廟の前にあります。台上面に横長の水鉢と左右奥に花立てが深く彫りこまれ, 台正面に四角型石燈籠と同じ法号と「慶長十九」(1614 年)が彫られています(栗山ほか, 2008)。

台・竿・基礎に使われた花崗岩の帯磁率 6.8×10^{-3} SI, 5.9×10^{-3} SI, 5.9×10^{-3} SI は, 四角型石燈籠に使われた花崗岩の値と同じであり, 早月川の川原にある花崗岩の多頻度帯 6×10^{-3} SI \sim 9×10^{-3} SI(長, 2017a)と対比できました。

3.7 無縫塔(瑞龍寺の歴代住持の墓標)

石廟の東側に 23 基の無縫塔があります。これらは瑞龍寺の歴代住持の墓標です(栗山ほか, 2008)。

20 基が安山岩, 2 基が花崗岩, 1 基が砂岩でした。安山岩では, 戸室石に見られる白い斑晶を認めませんでした。20 基に使われた安山岩の帯磁率ヒストグラムを第 1 図 g に示します。戸室石ではほとんど測定されない帯磁率 20×10^{-3} SI 以上のものが 7 基ありました。

4. 八丁道にある石造物

現在の八丁道は平成 2 年(1990 年)に整備されたものです。六角型石燈籠(口絵 p. 32 写真 12)が 2 基, 一時期瑞龍寺境内に移されていた四角型石燈籠(口絵 p. 32 写真 13)が 32 基あり, 他に新しく造られた 20 基の石燈籠があります(栗山ほか, 2008)。

石燈籠に使われた石材とその帯磁率を, 第 1 表に示します。

4.1 六角型石燈籠(八丁道)

2 基の六角型石燈籠はほぼ同形・同寸です。2 基とも, 五十回忌の寛文 3 年(1663 年)の造立と考えられています。用材は全て青戸室石で, 瑞龍寺の六角型石燈籠とほぼ同形・同寸です(栗山ほか, 2008)。

2 基の宝珠・火袋・中台・竿・基礎・基壇に使われた青

戸室石 15 石の帯磁率は 9.0×10^{-3} SI \sim 16.3×10^{-3} SI でした。

4.2 四角型石燈籠(八丁道)

32 基の四角型石燈籠の宝珠・露盤・笠・火袋・中台・竿・基礎の形状・寸法は規格化され, 彫成もほぼ同じであったために, これまでの幾度かの移設によって各部位の組み合わせが変わったようで青戸室石と赤戸室石が混在するものがあります。32 基全ての竿正面に刻字があり, 「奉造立為瑞龍院殿聖山英賢大居士」が共通し, 「寛永捨五戊虎年」などの年号も同じで, 寄進者名に「本田安房守政重」, 「奥村河内守栄□」, 「横山山城守長知」, 「前田三左衛門」, 「長九郎左衛門」があります寛永 15 年(1638 年)は二十五回忌にあたります(栗山ほか, 2008)。

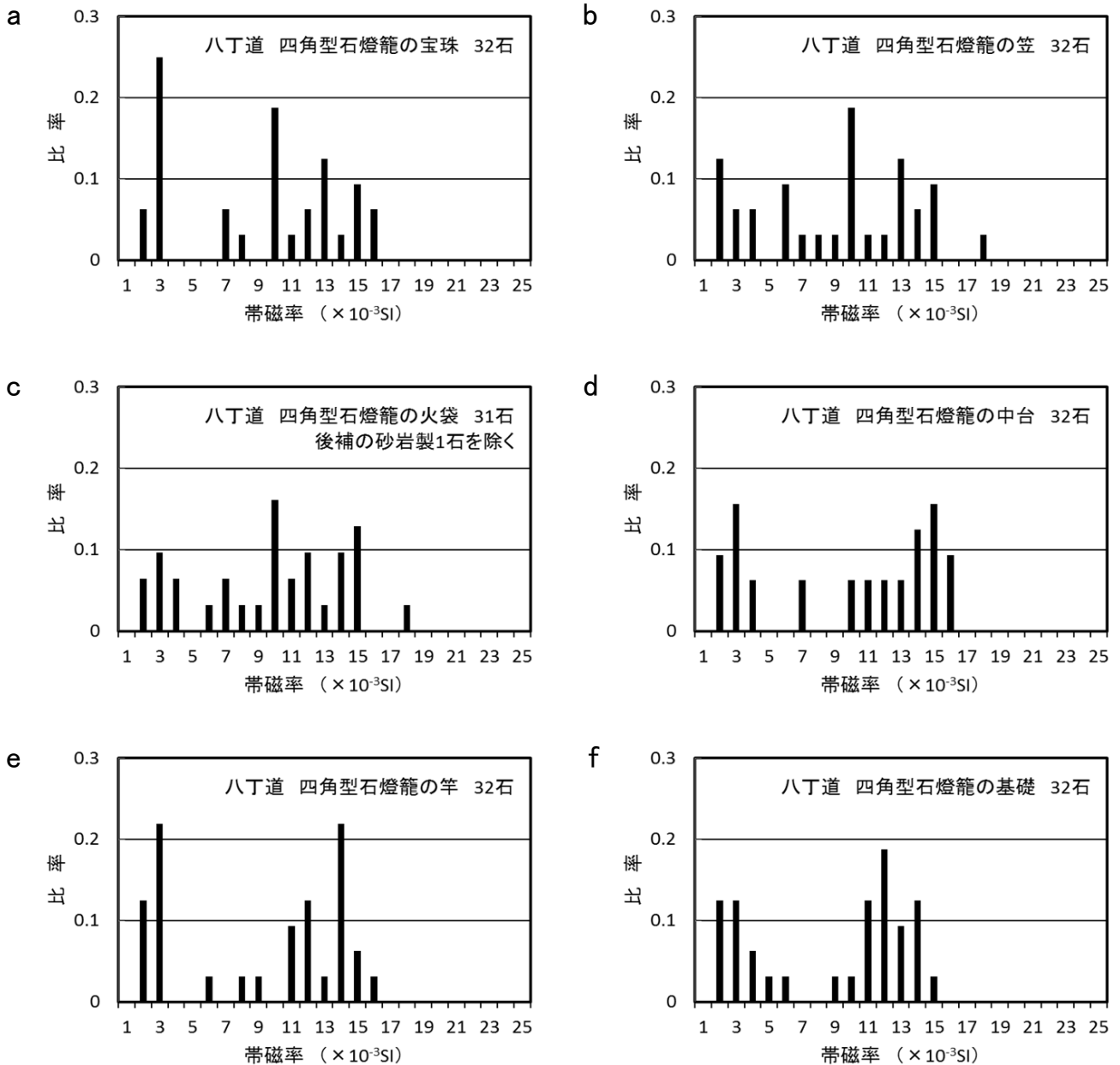
32 基の宝珠・笠・火袋・中台・竿・基礎での帯磁率ヒストグラムを, それぞれ第 2 図 a \sim f に示します。露盤は, 携帯型岩石帯磁率測定器(KT-6)の測定面の大きさ(直径 60 mm)を確保できず, 測定しませんでした。これら 6 部位のヒストグラムに大きな違いを認めません。造立時には同一色での色合わせが行われたでしょうから, 当然の結果だと思います。第 3 図は, 宝珠・笠・火袋・中台・竿・基礎ごとに帯磁率を昇順に並べたグラフです。同順番の宝珠・笠・火袋・中台・竿・基礎の帯磁率の値の差は 4×10^{-3} SI 以内です。

利長墓の基壇下段上面の赤戸室石の帯磁率(第 1 図 b)は, ほとんどが 5×10^{-3} SI 未満でした。利長墓の基壇の下段立面の青戸室石(第 1 図 c), 内区の 9 基の六角型石燈籠の青戸室石(第 1 図 e), 瑞龍寺の 10 基の六角型石燈籠の戸室石(第 1 図 f)の帯磁率は, ほとんどが 11×10^{-3} SI 以上でした。八丁道の四角型石燈籠の戸室石では, 5×10^{-3} SI 以上 11×10^{-3} SI 未満のものが 54 石(28 %)あることから, 「ニタリ」(富田, 2013)と呼ばれる中間色の石燈籠もあったと考えられます。

5. 終わりに

高岡市にある前田利長ゆかりの石造物での青戸室石と赤戸室石の選択的な使用は, 八丁道にある寛永 15 年(1638 年)の二十五回忌に寄進された四角型石燈籠ではなく, 正保 3 年(1646 年)の三十三回忌に竣工した利長墓の基壇において初めて行われました。

利長墓以前の墓で石製基壇を持つ墓は, 静岡市の久能山東照宮にある徳川家康墓のみで, その基壇は 1 段で 13.2 m 四方・高さ 2.0 m ですので(岡本, 2008), 利長墓基壇

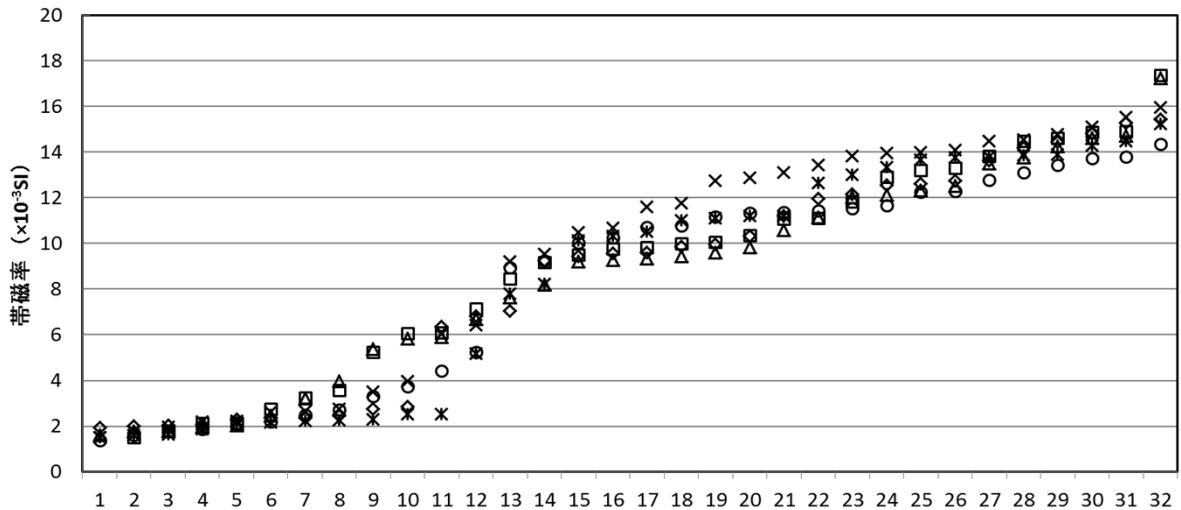


第2図 八丁道にある四角型石燈籠32基の各部位での帯磁率ヒストグラム、帯磁率 $(n-1) \times 10^{-3}$ SI 以上 $n \times 10^{-3}$ SI 未満の個数を全数に対する比率で示す。
a: 宝珠, b: 笠, c: 火袋, d: 中台, e: 竿, f: 基礎

は家康墓基壇を凌駕します。

三代藩主利常が利長墓所の造営を命じた正保2年(1645年)3月の翌4月に、4代藩主光高(1615-1645。父は利常、母は徳川秀忠の娘珠姫)が急逝し、まだ3歳であった綱紀(1643-1724。父は光高、母は水戸光圀の姉で徳川家光の養女)が家督を継ぎます。利常は、寛永16年(1639年)に家督を光高に譲り小松城に隠居していましたが、光高の急逝により幼年の5代藩主綱紀の後見役としてふたたび藩政を担うことになりました。將軍徳川家との姻戚関係が

進む中、前田家は徳川家と対等であることを示す前田家の象徴を、利常は必要としたのではないのでしょうか。それが、家康墓基壇を凌ぐ大きさと装飾を施した利長墓基壇でした。利長墓基壇の立面は青戸室石で彩られ、上面は赤戸室石で彩られました。三十三回忌に参列した前田家家臣に与えた影響は大きかったはずで、その後まもなく内区に奉納された六角型石燈籠は青戸室石で作られました。五十回忌の寛文3年(1663年)の造立とされる瑞龍寺の六角型石燈籠は、青戸室石で作られていて、三十三回忌での配



第3図 昇順で並べた八丁道にある四角型石燈籠32基の各部位の帯磁率。
◇：宝珠，△：笠，□：火袋，×：中台，*：竿，○基礎

色が引き継がれました。

金沢城では、寛文5年(1665年)修築の土橋門台西側石垣は青戸室石で築かれました(長, 2017b)。玉泉院丸庭園では本丸方向の石垣に青戸室石の使用が多く、二ノ丸御殿方向の石垣に赤戸室石が多用されました(長, 2017b)。明和3年(1766年)に修築された(石川県金沢城調査研究所, 2009)本丸鉄門北側石垣に青戸室石が多用されました(長, 2017b)。文久3年(1863年)に13代藩主齊泰が建てた成巽閣(国指定重要文化財)の「群青書見の間」と「群青の間」は顔料に高価なウルトラマリンブルーを使った群青色で彩られています(江本, 1972)。藩祖利家を祀る尾山神社の神門(明治8年(1875年)竣工, 国指定重要文化財)は青戸室石と赤戸室石が交互に積み重ねられています。

謝辞：前田利長墓所での調査では、公益財団法人成巽閣と高岡市教育委員会文化財課の許可・協力をいただきました。高岡山瑞龍寺での調査では、四津谷道宏住職の許可をいただきました。記して謝意を表します。

文 献

栗野 隆・宇佐見孝・酒井英男・千田嘉博・高岡 徹・西井龍儀・仁ヶ竹亮介・岡本淳一郎・田上和彦(2013) 富山県高岡市高岡城跡詳細調査報告書。高岡市教育委員会, 213p。
長 秋雄(2013) 戸室石の帯磁率測定。戸室石切丁場確認調査報告書Ⅱ(金沢城史料叢書18), 石川県金沢城

調査研究所, 216-228。

長 秋雄(2017a) 帯磁率ヒストグラムによる富山城石垣と高岡城石垣の採石地推定。論集 富山城研究, 富山城研究会, 1, 1-28。
長 秋雄(2017b) 金沢城の切石積石垣での帯磁率と色彩意匠。GSJ地質ニュース, 6, 357-363。
江本義理(1972) 成巽閣の色壁。保存科学, 9, 1-14。
星 博幸・石渡 明(2004) 石川県戸室火山溶岩ドームの岩石磁気と古地磁気。地質学雑誌, 110, 536-544。
石川県金沢城調査研究所(2009) よみがえる金沢城2ー今に残る魅力を探るー。石川県教育委員会, 139p。
石渡 明(2001) 金沢周辺ー火山と火山岩。北陸の自然をたずねて, 日曜の地学6, 築地書館, 92-97。
木越隆三・富田和気夫・布尾幸恵(2010) 金沢城跡石垣修復工事報告書ー玉泉院丸南西石垣ー(本文編)(金沢城史料叢書10)。石川県金沢城調査研究所, 177p。
北垣聡一郎・木越隆三・石野友康・富田和気夫・西田郁乃・加藤克郎・布尾幸恵・細田隆博(2008) 戸室石切丁場確認調査報告書Ⅰ(金沢城史料叢書9)。石川県金沢城調査研究所, 253p。
小松天満宮(2017) 由緒・文化財指定状況。http://www.bairin.net/JapaneseHP/Yuisho/yuisho1.htm(2017年7月12日 確認)
栗山雅夫・酒井英男・岡本淳一郎・西井龍儀・宇佐見 孝・太田久夫(2008) 高岡市前田利長墓所調査報告書。高岡市教育委員会, 176p。

- 日本海文化研究室（1976） 金沢城郭史料—加賀藩穴生方後藤家文書—, 石川県図書館協会, 688p.
- 岡本淳一郎（2008）近世初頭大名墓における前田利長墓の系譜. 高岡市前田利長墓所調査報告書. 高岡市教育委員会, 117-132.
- 酒寄淳史（2013）戸室石の岩石特性. 戸室石切丁場確認調査報告書Ⅱ（金沢城史料叢書 18）, 石川県金沢城調査研究所, 213-215.
- 高岡市（2017）「日本遺産（Japan Heritage）」に高岡が認定されました. <https://www.city.takaoka.toyama.jp/bunsou/nihonisan/nihonisan.html>（2017年7月7日 確認）
- 高岡市教育委員会文化財課（2009）国指定史跡 加賀藩主前田家墓所 前田利長墓所. 高岡市教育委員会文化財課, 8p.
- 富田和気夫（2013）歴史的環境. 戸室石切丁場確認調査報告書Ⅱ（金沢城史料叢書 18）, 石川県金沢城調査研究所, 5-12.
- 富山県（2017）平成29年1月1日現在の住民基本台帳人口及び世帯数. http://www.pref.toyama.jp/cms_pfile/00010908/01007568.pdf（2017年7月7日 確認）

CHO Akio (2018) Color and magnetic susceptibility of stone sculptures in Takaoka city, consecrated to the second lord of the Kaga clan Maeda Toshinaga.

（受付：2017年10月2日）